

# くらしの中で読む 『正法眼蔵』

おうさくせんだば  
王索仙陀婆の巻 その三

成興寺住職 小倉玄照

宏智古仏のことば

大宋慶元府天童山宏智古仏、上堂、示衆に云

く、

「挙す、僧、趙州に問ふ『王索仙陀婆の時如

何。』趙州、曲躬叉手す。雪竇拈じて云く、『塩

を索むれば、馬を奉ず。』師云く、『雪竇は一百

年前の作家、趙州は百二十歳の古仏なり。趙州

も是ならば、雪竇不是ならん。雪竇も是な

らば、趙州不是ならん。しばらく道へ、畢竟如何。』天童、箇の注脚を下すことを免れず。これに差ふこと毫釐なれば、これを失ふこと千里なり。会するもまた草を打ちて蛇を驚かす。会せざるもまた錢を焼きて鬼を引く。荒田揀ばず老俱胝、只今手に信せて拈じ来る底。」

先師古仏上堂のとき、よのつねにいはいはく、「宏智古仏」。しかあるを、宏智古仏を古仏と相見せらる、ひとり先師古仏のみなり。宏智のとき、徑



山の大慧禪師そうかう宗杲ざんといふあり、南嶽の遠孫せんぞんなるべし。大宋一國の天下おもはく、大慧は宏智にひとしかるべし、あまりさへ宏智よりもその人なりとおもへり。このあやまりは、大宋国内の道俗、ともに疎学にして、道眼いまだあきらかならず、知人あきらめなし、知己ちきのちからなきによりてなり。

宏智のあぐるところ、真箇の立志あり。

趙州古仏、「曲躬まげ叉手しやしゆ」の道理を参学すべし。正当しやうたう應時いんもじ、これ「王索仙陀婆」なりやいなや、

「臣奉仙陀婆」なりやいなや。

雪竇の「索塩奉馬」の宗旨を参学すべし。い

はゆる索塩奉馬、ともに王索仙陀婆なり、臣索仙陀婆なり。世尊索仙陀婆、迦葉破顔微笑かせふはがんみせうなり。

初祖索仙陀婆、四子、馬塩水器を奉す。馬塩水

器のすなはち索仙陀婆なるとき、奉馬奉水するくわんれいし。関くわんれいし椀くわんれいし子、学すべし。

〈現代語私訳〉

大宋國は慶元府の天童山の宏智古仏（一一五七寂、寿六七）は、法堂ほつだうに上り、修行者たちに示して云った。

「ここに一つの問題提起をする。ある僧が、趙州に問うて云った。

『王が仙陀婆を索めた時には、どういたしますか』

その時、趙州は、手を身前に組み、ねんごろに身をかかめて頭を下げた。雪竇は、それを評して云った。

『塩を索めているのに、馬をさしあげた』  
師は、このことについて言った。

『雪竇は、百年前の大人物、趙州はと云うと、これは百二十歳まで生きた古仏。趙州の態度をよしとするなら雪竇は否定される。雪竇の言をよしとするならば趙州が否定されなければならぬ。さて、これをどう考えるか、いったいどうしたことか。わたしもこれに関して注釈を加え

なければなるまい。しかし、判断をほんのわずかに誤れば、とんでもない結果を招くことになる。なるほどとわかつてみたところてくさむら打って蛇を驚かすだけのこと、またわからぬからとてそれは、紙銭を焼いて死人のおぼけを引き寄せるようなもので、たいしたことはない。わからうがわかるまいがとんとおかまいなしたった俱胝和尚。いつでもどこでもただ指をお立てしていた、そこを学ばねばなるまい。」

今はもうおなくなりになった私の師である如浄古仏は、上堂のとき、しばしば「宏智古仏」と敬慕して仰せになっていた。だがしかし、宏智古仏を古仏として相見えておられたのは、ただひとり先師せんじの如浄古仏だけであった。ところでその宏智の時代、径山きんざんに大慧禪師宗杲そうこうという人がいた。南嶽懷讓（六七七—七四四）の流れを汲む者のようである。大宋国の人々はおおむね大慧は宏智と同程度の人物だろうと考えてい

る。いや、むしろ宏智よりも大人物であると思っているふしもある。このような誤りはなぜ起ったか、それは大宋国の出家も在家も、ともに不勉強で、真実をみる眼に乏しく、人物を見定める力量もなく、自分自身を知る力も充分でないからである。

宏智のことばには、ほんものの心意気がある。趙州古仏がねんごろに身をかかめて頭を下げたことの意味をよくよく学ばなければならぬ。まさにこの時、王が仙陀婆を求めたのかどうか、臣は仙陀婆を奉ったことになるのかどうか。雪竇せつどうがそれに対して「塩を索めたのに馬を奉った」と評したことの真意をよくよく学ばねばならぬ。いうところの「塩を索めたのに馬を奉った」というのは、ともに王が仙陀婆を索め、臣が仙陀婆を索めたのである。世尊が仙陀婆を索めると迦葉は破顔微笑したのである。初祖達磨大師が仙陀婆を索めるとその四人の弟子は、馬とか

塩とか水とか器とか、それぞれ奉った。馬・塩・水・器のことごとくを索める仙陀婆である時、馬を奉り、水を奉るといふやり方に秘められた急所をよく押さえておかねばならぬ。

塩を索めるに馬を奉ず

ここで宏智古仏と最上級の敬語で称揚されていますのは、宏智正覚（一一五七寂、寿六七）のことです。道元禪師が正師と仰がれる如浄禪師が住された天童山に三十年にわたって住山し、荒廃していた天童山を一一〇〇人の雲水を修行させることの出来る禪寺として整備されました。天童山中興の祖と称せられる方です。

黙々として坐禅する、いわゆる黙照禅をその禅風とされた方で、「只管打坐」（ただただひたすらに坐りぬく）とか、「無所得、無所悟」（さとりなどを問題にしないでただ坐る）とかいう曹洞宗の禅風に大きな影響を与えました。

殆ど同時代に活躍した大慧宗杲（一一〇八九—一一六三）は、公案を工夫することによって次第に悟りの境地を深め、遂には大悟徹底しなればならぬとして、黙照禅を攻撃し、看話禅を鼓吹しました。臨済宗の禅風は、その影響を強く受けているわけです。

道元禪師が、宏智正覚を古仏として称揚されるのに対し、大慧宗杲を厳しく批判されるのは、これは、当然のことと言えます。

ところで、その宏智古仏が問題にした「王索仙陀婆」の話について考えてみましょう。

これは、王が仙陀婆を索めた時に、常にその意に添うような馬・塩・水・器を奉るのが有能な臣とは限らないのではないか、むしろ時によると意図的に王の意に反する馬・塩・水・器を奉る臣の方が忠義な臣である場合もあるのではないか——という問題提起と受けとめられます。

つまり、王の顔色をいつも窺<sup>うかが</sup>いながら、ひたすら御意<sup>ごい</sup>に従うべく努<sup>と</sup>めているだけでは、臣としての職務は全う出来ないのです。それはそうでしょう。王が、時によると誤<sup>あや</sup>った行動に出ようとする場合もあるはずです。そんな時、臣が追従していたのでは大変なことになるます。王の意中<sup>いぢゆう</sup>にあえて逆<sup>さか</sup>らう仙陀婆<sup>せんだば</sup>の選択<sup>せんたく</sup>をし、さりげなく王を諫<sup>いさ</sup>めることが出来なければ、とても忠臣<sup>ちゆうぢん</sup>とは言えません。

しかも、その場合、王の意に反する馬・塩・水・器<sup>き</sup>を奉<sup>ほう</sup>りながら、王に有無<sup>うむ</sup>を言<sup>い</sup>わせぬだけの力量<sup>りきやう</sup>を臣<sup>ぢん</sup>が備<sup>び</sup>えていなければなりません。王が腹<sup>はら</sup>を立ててしまったのでは、諫言<sup>いさげん</sup>どころの話<sup>わたりごと</sup>ではなくなってしまうでしょう。

### 指示待ち人間は困る

宏智古仏<sup>こうちこぶつ</sup>のことばは、世俗<sup>せきじゆ</sup>の王と臣との関係<sup>かんけい</sup>をとりあげながら、修行上<sup>しゆぎやうじやう</sup>の師と弟子<sup>でし</sup>のありよ

うを問題<sup>もんだい</sup>にしています。

「王<sup>わう</sup>が仙陀婆<sup>せんだば</sup>を索<sup>さく</sup>めた時、いったいどうしまするか」

という僧<sup>そう</sup>の問<sup>もん</sup>に、趙州<sup>しゆうしゆう</sup>(七七八―八九七)は、最敬礼<sup>さいけいらい</sup>をしてみせました。これは、ことばによる理<sup>り</sup>づめの解答<sup>かいとう</sup>ではありません。むしろそれを拒<sup>きよ</sup>否<sup>ひ</sup>してみせたと云<sup>い</sup>つてよいでしょう。王<sup>わう</sup>索<sup>さく</sup>仙陀婆<sup>せんだば</sup>の時、臣<sup>ぢん</sup>に問<sup>もん</sup>われるものは、その人格<sup>じんかく</sup>・力量<sup>りきやう</sup>なのです。

それを評<sup>ひやう</sup>した雪竇<sup>せつざう</sup>(九八〇―一〇五二)もそのことがいいたいほどにわかっていました。

「塩<sup>しほ</sup>を索<sup>さく</sup>めているのに、馬<sup>うま</sup>をさしあげた」

と、一見<sup>いちけん</sup>、趙州<sup>しゆうしゆう</sup>の態度<sup>たいど</sup>を批判<sup>ひはん</sup>的に見<sup>み</sup>ているように受けとれますが、実は、そうではなくて、「索<sup>さく</sup>塩<sup>しほ</sup>奉<sup>ほう</sup>馬<sup>ば</sup>」の趙州<sup>しゆうしゆう</sup>のやり方<sup>やりかた</sup>こそ師<sup>し</sup>と弟子<sup>でし</sup>の関係<sup>かんけい</sup>を正常<sup>じやうじやう</sup>にするのだと肯定<sup>きやうてい</sup>しているのです。

どんなに親密<sup>しんみつ</sup>な関係<sup>かんけい</sup>であっても、師<sup>し</sup>と弟子<sup>でし</sup>の間<sup>ま</sup>には、ある種の緊張<sup>けんじやう</sup>関係<sup>かんけい</sup>が必要です。なれあ

いでことが運んでいくようになりますと、双方の横着本性が知らずしらず頭をもたげて安きについてしまうからです。師の指示が明解に過ぎても駄目なようです。弟子は、ただ師の指示に従うのみで、主体性を喪失したいわゆる指示待ち人間になってしまいやすいからです。

### 臣索仙陀婆

このごろの若い保母さんを見ていますと、子供に対してやたらと指示をする傾向があつて気になります。例えば、先日もホールに四、五才児を並べて正座をさせたのですが、担任の若い保母さんは、一人一人の子供に坐る位置をさし、手を子供の肩に置きながらまさに手とり足とりの格好で坐らせています。ああそんな過剰に世話を焼いては駄目だ、一番はしつこの子供の位置だけをだいたい指示したら、少し離れたところから黙ってみていなさい。子供は、ち

やんと適当な間隔をとって座位を決めることが出来るのだから——と私は、その保母さんに申しました。はたせるかな子供たちは、適当にバランスよく自分の位置を決めて坐りました。

まったく放任した状態で、サア、きちんと位置について坐りなさい、と言つても、四、五才の子には出来ません。かと申して、手とり足とりでは話になりません。その辺の消息が指導の勘どころなのです。幼少の頃から、手とり足と



りの指示で育った人が想像以上に多いのでしよう。そういう勦を殆ど持ち合わせていないような若い人がやたらと目について私は気になります。

僧の間に、最敬礼で趙州は答えました。さて、その次に問を發したその僧は、どういう行動をとったのでしょうか。それは、ここには記してありません。しかし、それを考えてみることから私どもの修行が始まるのです。

どんな問を受けても、指一本をおつ立てた俱胝和尚のやり方を奇人扱いにしているはいけななのです。指一本をおつ立てた俱胝和尚のつき放した姿勢にハッと驚き、或いは大いにとまどい、サテどうするか、と自らの行動のありようを真剣に考え抜くときに、自立した人間の生き方が可能になると申してよいでしょう。

今、私は保育園という子育ての最前線に身を置いていますが、保育や教育にたずさわる

人が、既成の概念にふりまわされているのではないかと懸念しきりです。つまり、心理学や教育学やら、子育てに関わる学問の成果（厳密にはその一部をつまみぐいしているだけです）をうのみにし、それを十人十色の子供たちに一律に適用しようとしているのではないかと気になるのです。子供自身が内に秘めている可能性は、無限のはずです。指一本おつ立てて、索仙陀婆すれば、子供の側からの奉仙陀婆は、まさに千差万別——既成の心理学や教育学で、その奉仙陀婆のありようを律しきることは出来ないのです。

そういう意味では、子育てに関わっている現代の大人たちは、「王索仙陀婆」に対しては、的確な「臣奉仙陀婆」を要求するのみで「臣索仙陀婆」ということも、きわめて大切な問題なのだということをつっかり忘れてしまっているように思えるのですが、どんなものでしょうか。